

日本近世文学会秋季大会のご案内

会員の皆様には時下ますますご清祥のことと存じます。

さて、二〇二一年度秋季大会を左記の通り開催いたしますので、ご案内申し上げます。

二〇二一年 十月 十八日

日本近世文学会秋季大会世話人

入口敦志

大会プログラム

【会場】立川オンライン会場

日本近世文学会事務局代表

神作研一

【行事】

【日本近世文学会事務局】

第一日 十一月二十日(土)

中京大学文学部 柳沢昌紀研究室

柳沢昌紀

委員会 (一一・〇〇～一一・二〇)

〒466-0825 名古屋市昭和区八事本町一〇一―二

会場開室 (一一・三〇〇)

電話 〇五二―八三五―七三二八(研究室直通)

開会時間 (一一・三・三〇)

メールアドレス info@kinscibungakukai.com

シンポジウム (一一・三・四〇～一六・四〇)

「〈見せる／魅せる〉近世文学」

パネリスト

出光美術館

金子馨

大東急記念文庫

長田和也

印刷博物館

中西保仁

西尾市岩瀬文庫

林知左子

ボドリアン日本研究図書館

アレックスドロ・ビアンキ

ホノルル美術館

南清恵

デイスカッサント

鶴見大学

加藤弓枝

司会

国文学研究資料館

木越俊介

第二日 十一月二十一日(日)

会場開室 (一〇・〇〇)

研究発表会 午前の部 (一〇・三〇～一一・五〇)

1 幕末維新期における太閤記物の切附本——本文と挿絵の典拠をめぐって——

総合研究大学院大学(院)

伊藤美幸

2 版本の表紙裏に漉き込まれた毛髪 of 科学分析からわかること

——安定同位体分析とPIXE分析——

国文学研究資料館

入口敦志

龍谷大学

丸山裕敦

龍谷大学

眞田裕生

龍谷大学

木村俊太郎

立命館大学

桑木捷汰

アルファ・タウ・メデイカル

神松幸弘

QST量子医科学研究所

及川将一

東京都立一橋高等学校

小田島由佳

昼休み (一一・五〇～一一・三〇)

編集委員会 (一一・〇〇～一一・三〇)

研究発表会 午後の部 (一一・三〇～一六・二〇)

3 『拾遺御伽婢子』作者をめぐる一考察——巻五の二「義士忠死」を中心に——

東京都立一橋高等学校

小田島由佳

4 『女郎花物語』に見る季吟と和歌に関する一考察

静宜大学

陳羿秀

5 許六の俳文観——『五老文集』・『許六集』所収「五老井記」の分析——

上智大学(院)

砂田歩

6 大坂出版史における絵入根本

甲南女子大学(非)

北川博子

閉会 (一六・二〇)

シンポジウム要旨

〈見せる／魅せる〉近世文学

国文学研究資料館 木越 俊介(司会)

従来に比して、研究者が附属図書館などで資料展示を担当する機会は格段に増えてきたが、おそらく各自が手探りで試行錯誤しているのが現状ではなからうか。

そこで今回は、改めて近世文学を(みせる)という観点から捉え直すべく、近世文学に関わる展示を手がけられたご経験を有する国内外の方々をお招きし、そこから得られる知見や課題を共有し、意見交換をしたい。

文学関連の資料を展示する場合、おおよそ絵巻物を含む書籍や古筆・短冊類などが中心となり、多分に文字を含んだモノを見せるという点において、いわゆる絵画や立体物とは異なる面白さ、難しさが存すると思われる。また、キャプションによって内容をいかに、どこまで紹介するかなど、付加情報の提示にも工夫が必要となるだろう。

展示は、より広い層に対し近世文学が試される場であり、多くの可能性を秘めている。今後は、SNSや新たなデジタルツールの活用などを通して、新たな試みもますます増えていくことが期待される。本シンポジウムを通して、各々の展示のさらなるレベルアップを目指す機運が学会全体で高まればこれにまさる喜びはない。

また、コロナ禍でのミュージアム閉館が大きな波紋を呼んだことは記憶に新しい。改めてその役割の大きさが実感されるいま、こうしたシンポジウムを開催することは極めて意義のあることと確信する次第である。

パネリスト

試行錯誤の繰り返し

出光美術館 金子 馨

出光美術館では所蔵するコレクションで展覧会を構成するため、仙厓や芭蕉など、数年に一度は近似した内容で展覧会を企画する。出品する作品が重複する場合も多いが、鑑賞者に飽きずに見ていたけるような工夫が求められる。また、古筆や短冊などの文字の細かな作品や、卷子や手鑑のように見進める方向が決まっている作品は、企画の流れの中で心地よく鑑賞していただけるような工夫が必要であろう。展覧会を作る上でどのような工夫を重ねて「展示・公開」しているか、ご紹介したい。

美術館における古典籍の展示・解説について

大東急記念文庫 長田 和也

大東急記念文庫は主に和漢の古典籍を所蔵する特殊文庫だが、併設の五島美術館の展示室にて所蔵品を展示する機会がある。来館される方は必ずしも近世文学に関心があるとは限らない。そうした状況において、展示映えする箇所を見せつつ洒落本や黄表紙等の面白さを文章で伝える際に直面した困難について報告する。関連して、望ましい英文タイトルのあり方や、掛け軸等に捺された印文の人気についても議論したい。

和書ルネサンス展での「魅せる」工夫

印刷博物館 中西 保仁

今年四月と七月に開催した「和書ルネサンス——江戸・明治初期の本にみる伝統と革新」展を取り上げたい。近世初期の絵巻物から活字本、江戸中期の浮世絵や草双紙、そして幕末明治期の教科書や雑誌——バラエティに富む作品をどうしたらご覧いただけるか？真っ先に考えたのが、想定される来館層の絞り込みだった。ターゲットに合わせた集客や演示方針、個々の展示作りこみについて実例を挙げて報告する。

古典籍の豊かさ・面白さを伝えたい

西尾市岩瀬文庫 林 知左子

当文庫では平成十五年から今年十月までで約九十タイトル、所蔵の古典籍を使用した企画展を絶え間なく開催。多彩なジャンルの展示を通し、古典籍が決して「オワコン」ではなく、今の我々にも十二分に役立つ、楽しめるものと伝える。また展示と連動の体験講座や古文書講座等も催し、一般の方や子どもまで古典籍に親しめるよう工夫している。古典籍へのハードルを下げ、最終的には原本閲覧に繋がりたいと願う当文庫の模索を紹介する。

「もの」としての近世文学 —— 異文化と言葉の壁を越える ——

ボドリアン日本研究図書館 アレッサンドロ・ビアンキ

文学は写本と版本をはじめ掛軸や屏風などのような美術作品の形をとって実現する。強いて言えば、古典文学を鑑賞するにあたって文章を読みながらイメージを見ることが同様に、当時の書物などのマテリアリティと形態を知ることが大事な要素であると言える。本発表は、江戸文学を保存し伝達される様々な媒体を中心にして、崩し字や近世期の文化の知識が浅い一般観客にも文学作品の魅力が実感させられるような展示方法やアプローチを探る。

古典籍の魅力を海外で伝える試み

ホノルル美術館 南 清恵

日本語が母国語ではない来館者向けに古典籍を展示する際には「日本独自の文化」と「くずし字」という大きなハードルがある。それらを外国人にわかりやすく説明し、楽しんでもらうため、くずし字を英訳し全頁閲覧可能にしたタブレット型端末を実物の作品と並べる展示方法など、本発表では「スマートデバイスの活用・美術館としての強みを生かした展示・イベントでの集客」という観点から海外における古典籍展示の試みを紹介する。

幕末維新时期における太閤記物の切附本——本文と挿絵の典拠をめぐって——

総合研究大学院大学（院） 伊藤 美幸

太閤記を題材とした出版物の流行は『繪本太閤記』の絶版により一度下火になるが、幕末維新时期に再び太閤記物が流行し、切附本や繪本、錦絵のかたちで次々と出版された。近年は武者絵や太閤記研究の進展により、幕末維新时期の太閤記物について言及される機会が増えている。しかし、その全貌を把握することは容易ではなく、とりわけ速成多作を第一とする切附本の本文・挿絵の典拠にまで目配りされることは極めて稀である。

本発表では、太閤記物の切附本における本文典拠を検討し、①読本『繪本太閤記』の影響作と②実録を抄録した作とがあることを指摘する。①では、『真柴軍功記』や『羽柴雲昇録』、伊勢屋庄之助版『繪本太閤記』があり、幕末における『繪本太閤記』の広がりを確認できる。②では、山口屋藤兵衛版『日吉丸誕生記』が、『真書太閤記』の抄録であることを報告する。

先行研究では、切附本に見られる抄録法の一つとして原文の切り貼りによる抄録の作成が指摘されており、太閤記物も同様の手法が多用されている。一方、挿絵に関しては『繪本太閤記』の単純な模倣ではなく、細部の描き変えが認められた。

今回、従来判然としなかった②の具体的な利用の様相が見出せたように、引き続き本文の典拠探索を行うことよって、切附本と実録との影響関係の実態がさらに明らかになることが期待される。その意味で、本発表を、実録・講談読物としての切附本を考察していく一起点としたい。

版本の表紙裏に漉き込まれた毛髪の科学分析からわかること

——安定同位体分析とPIXE分析——

龍谷大学

丸山 敦 入 口 敦 志
木村 俊太 郎 桑木 捷生QST量子医学研究所 及川 将弘
アルファ・タウ・メディカル 二ツ川 章二

江戸の版本類の表紙に使われている漉き返しの紙には、人の毛髪が漉き込まれていることがある。そこに注目した丸山らは、毛髪の窒素や炭素の安定同位体分析を用い、江戸時代の食生活がほぼ米と海産魚に依存していたことを明らかにした（「Hairs in old books isotopically reconstruct the eating habits of early modern Japan」『Scientific Reports』 Nature Springer 2018）。しかし、この時のサンプルは二二点と少なく、都市間の差異や時期による変遷までを明らかにすることは出来なかった。

その後、龍谷大学大宮図書館の全面的な協力を得て、約七万冊（概数）の版本を精査し、約四〇〇点から毛髪を採取、分析を行った。その結果、江戸時代をとおして、粟や稗を食べる割合が減ったこと、その割合の減少は、三都すべてで起こっていること、海産物への異存割合が増加していたこと、江戸については、京、大坂に比べて粟や稗を食べる割合が高かったことが明らかになった。

この結果から、漉き返しの紙につき、一、作られた地域で流通し都市間の移出入はなく、二、作られて比較的短期間で消費された、という知見が得られる。書目については、通俗書が少なく予想に反するが、これは対象とした書籍群の性質によると考えられ、更に網羅的な調査が必要である。

さらにPIXE分析によって、毛髪に含まれる金属の量に現代と江戸時代とで顕著な差があることがわかってきた。

『拾遺御伽婢子』作者をめぐる一考察——巻五の二「義士忠死」を中心に——

東京都立一橋高等学校 小田 島 由 佳

『拾遺御伽婢子』（柳糸堂、元禄十七年刊）は、江戸で刊行された怪異物語浮世草子であるが、作者の柳糸堂（夏目氏）については、どのような人物であるのか明らかになっていない。

巻五の二「義士忠死」は、「三方が原の戦い」で夏目吉信が徳川家康の身代わりとなって討ち死にを遂げるという武辺話である。ここで描かれる吉信戦死の経緯は、夏目家から幕府に提出された「貞享書上」の記述とほぼ重なっている。この史料が、当時世間に流布していたとは考えられないこと、世間に出回っていたと考えられる軍記類には吉信の戦死に関する詳細な記述が見当たらないことを考えると、『拾遺御伽婢子』の作者は、夏目家に伝わる吉信の伝記を知る者でなくてはならない。

巻一の五「末期罪業頭僧」は、怪異そのものよりも千光寺の僧侶の強欲な行いを批判する内容が中心である点に特徴が見られる。夏目吉信の三男信次の子孫は、元禄期にかけて千光寺の周辺である相模国愛甲郡飯山村の一部を領しており、四代目吉頭（寛文九く享保十五）は「貞享書上」を夏目家から幕府に提出した人物でもある。また、当時信次家の屋敷は本所石原町にあったと推定され、序文にある柳糸堂の居住地と矛盾しない。

以上の点から、元禄期の旗本夏目吉頭が『拾遺御伽婢子』の作者「柳糸堂」である蓋然性が高いと結論付けた。夏目吉信の子孫である作者は、怪異譚の中に武辺話を忍び込ませるという方法で、先祖の武功を世に知らしめようとしたのであろう。

『女郎花物語』に見る季吟と和歌に関する一考察

静宜大学 陳 羿 秀

『女郎花物語』は、万治四年（一六六一）に中野小左衛門によって刊行された仮名草子である。本書の作者は先行研究により近世前期に活躍した歌学者・北村季吟（一六二五く一七〇五）であることが明らかになっている。季吟は既に写本として流布していた『女郎花物語』を改編して板本『女郎花物語』を完成させた。写本と板本の異同については既に先行研究に報告されているが、本書は全話に和歌が数多く盛り込まれているにもかかわらず、和歌そのものに関する細かな検証は従来行われてこなかったように思う。

そこで『女郎花物語』に収録される和歌を精査したところ、一部に現在知られているとは異なる文言が含まれる箇所が見出せた。その中には国立公文書館内閣文庫蔵の写本『女郎花物語』と合致するものがあったので、本書における和歌は季吟が実見したであろう写本に依拠したと推測される。一方で、『女郎花物語』に収録されている和歌と、季吟の著した注釈書『八代集抄』（延宝七く九年成立）や『万葉拾穂抄』（貞享三年成立）を照合すると、季吟は『女郎花物語』における和歌の形を注釈書には採用していないことも判明した。

以上から、発表者は『女郎花物語』が成立した万治年間から、『八代集抄』が著された延宝年間までに、季吟の和歌知識が変化した可能性を指摘するとともに、『女郎花物語』における和歌の典拠を再検討する。

許六の俳文観 —— 『五老文集』・『許六集』所収「五老井記」の分析 ——

上智大学(院) 砂田 歩

「五老井記」は森川許六の俳文であり、『五老文集』・『許六集』所収の二つの自筆稿の存在が知られている。前者は初稿と見られるものであり、後者は『韻塞』(元禄九年刊)などの刊本の所収稿に近いものである。許六は、蕉門初の俳文集である『本朝文選』(宝永三年刊)の編者であるなど、俳文史において最も重要な人物の一人である。本発表では、先述の二つの自筆稿の分析を通して、許六がどのような俳文観を持っていたのかを検証する。

はじめに、「五老井記」が松尾芭蕉の俳文「幻住庵記」の模倣であることを、『五老文集』所収稿にもとづいて検証し、その構成の明確な対応を指摘する。次に、『五老文集』所収稿から『許六集』所収稿に至る改稿について分析し、対句の追加など、漢文体への志向が見られることを指摘する。終わりに、以上の分析結果の意義について検証する。構成への意識や漢文体への志向は、他の許六俳文の改稿方針や『本朝文選』の編集方針とも重なるものであり、許六の俳文観の中心となっていたものである。そして、それは『本朝文選』自序などに言及される、対和文意識の一つの表れとして捉えることができるものであることを論じる。

なお、「五老井記」の起稿は許六の芭蕉入門以前に、改稿は芭蕉入門以後に行われたものである。改稿に芭蕉の関与があった可能性についても触れる。

大坂出版史における絵入根本

甲南女子大学(非) 北川 博子

絵入根本とは主として大坂で版行された絵入の歌舞伎台帳である。奥付を欠くものや、後印本に初印本の刊記がそのまま残っているものも多く、初印・後印の見極めが難しい。近年、絵入根本の嚆矢とされる天明四年刊『思花街容性』の内容が確認された。享和二年刊『絵本戯場菜』からは、河内屋太助による役者似顔の絵入根本が出されていくが、毎年刊行の定期刊行物として定着するまでには、多くの試行錯誤の跡が見受けられる。

今回、『絵本戯場菜』以降、大坂で出版された絵入根本について、奥付、広告、蔵板目録などを調査し、それらを『大坂本屋仲間記録』の記事と照合していった。いくつかが判明したが、当初、絵入根本が外題替えて刊行されていた理由が、絵尽しの版元との関係にあった、ということもその一つである。

天保の改革が絵入根本に与えた影響は大きく、天保十三年に多くの作品が再版されている。改革後は河内屋太助が演劇関係の出版から手を引くこともあり、定期的には刊行されていないが、従来同様の絵入根本も出されており、さらには、絵入根本形式の読み物も出版されていくようになる。

本発表では、版元河内屋太助の動向、挿絵や口絵を手掛けた絵師との関連、歌舞伎上演との関わりなど、絵入根本を多角的な視点から考察し、その結果を具体的に報告していく。そして、絵入根本が大坂において、上演から離れた読み物として成長していく出版物であったことを、通史的に示していきたい。